

郵政特准掛號認爲新聞紙類  
中華民國三十年八月一日創刊  
第八卷八月一日創刊

# 京鹿子

八月號

丸山佳子  
聖五月

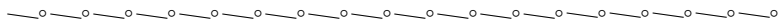
ペン持てばペンの心になる立夏

千号の親しき重み聖五月

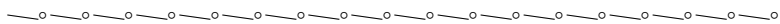
歴として立つ這う草も昭和の日

八十八夜わけなく好きになりし川





かりそめの人とも握手初ひばり  
どちらかと聞かれ川好き鮎も好き  
心みな同じにあらず登山口  
ほととぎす山にも銀座コーヒの香  
小鳥引き山にすぎたる紅い橋  
無にまさるもの見当らず亀が泣く

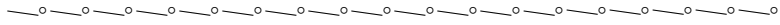


豊 田 都 峰

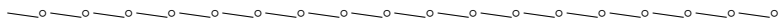
清響集 その八十八

新 緑 へ 千 木 高 々 と 剣 斎 く  
一 陣 は 常 盤 木 落 葉 の 逆 落  
首 賭 け し 戦 址 青 葉 の 雨 し の つ く  
首 塚 は い づ れ 狭 間 は 青 葉 寒  
絞 染 め に 卯 建 も 高 く 青 葉 の 宿





風をのせ雲をのせ夏川として  
信長忌湖上を高く鳥のゆく  
光秀忌遠ひかりして鳥一羽  
木耳や林の奥をわたる風  
黒南風やきのふにつづく出掛け事  
黒南風や宇治の荒瀬もよきひと日  
合歓咲いて宇治一帖を加へたし  
いざなはれ新茶と宇治の川瀬風



## 秀華採集

擦れ違ふ人の残せし春の闇

木村 真魚奈

自然の闇より底知れぬ闇。人が関わりと複雑になるが、「擦れ」とわざと漢字にしたことで作者に迫る闇にもなった。

葉ざくらや強火で通す厨ごと

佐久間 多佳子

初蝶の百万画素の震へかな

直江 裕子

前句の「葉ざくら」の座り方は鮮やかである。後句の光学画像的分析は楽しく美しい。

# 近 詠

村おこし

青 水 無 月 橋 の 向 か う の 村 起 し  
一 こ 糸 は 明 日 を 信 じ て 梅 雨 鴉  
梅 雨 明 け て 瑞 穂 の 国 の 風 の 唄  
豊 か な る 流 れ の ゆ く へ 芦 茂 る  
明 易 し 明 日 の こ と と て 風 騒 ぐ  
草 笛 や 思 ひ 出 は み な 忘 れ ゆ く  
草 笛 や 好 き な 駅 き て 風 が 押 す  
草 笛 に ふ る さ と の 景 引 き 寄 せ る

鈴鹿

仁

神麓集



新関 一杜

レース手袋そと捨てし別れ来て  
時代小説読みてひとりの蠅取りりボン  
水盗人の名人いたわいと田ん圃道  
大いなる干瓢すだれ雷雨来た  
汗ふきつすばると食べた泥鰌鍋

林 日圓

考証は有職故実青すだれ  
私心捨て無心のこころ山滴る  
聖武帝光明皇后うすもので  
法華寺の皇后モデル芒種の日  
東大寺毘盧舎那仏や袋角

昭和の日 北村 香朗

外に遊ぶこどもめつきり昭和の日  
日の丸は通りに一つ昭和の日  
生涯は現役たらむ昭和の日  
春の叙勲ふと目にとめし知人の名  
白百合にウエディングドレス末の孫

大文字 藤岡 紫水

ためらひもなく崩れぬ薔薇一花  
耳に溜む風の余韻や祭笛  
更衣袖の軽さにある不安  
花水木照り翳りして日照雨かな  
恋ふほどに火の薄れゆく大文字

野崎家 和田 照海

塩蔵に甲冑据ゑて端午の日  
縦若葉茶室へさそふ陰陽石  
内庭のみどり明りやさざれ石  
釣 忍 分 銅 石 の 塩 秤  
遅桜塩田王の武左衛門

花 笹 丸山 冬鳳

花笹連れ立ち連理の句碑詣  
連れ立ちて海道日和の花笠衆  
句碑に待すさくら侍史咲き枝垂れ咲き  
山雨快晴 杣路の溜り花鏡  
花笹さながら丹波の系露たち





明 易 高 木 智

明易き日の出頼りに湖西の湯  
ガラス戸に先客の蜘蛛明易き  
明易き湖西にあれど宵より雨  
一病をいとしんでゐる梅雨入りかな  
金婚に七年残す青嵐

彌 寝 瓶 史

時鳥写書仏と覚め安らけし  
短夜の教鞭振ふ夢のちち  
雨蛙予報は予報日がのぞく  
看板の一の反り様栗の花  
銀蠅にやさし牛の尾牧日ぐれ

流れる 森 津 三 郎

弔ひの一夜が明ける果ての雪  
坐りこみ日本たんぼぼしかと見る  
花櫛仏の国に送りたく  
麦秋の風が満ち満ちつ軍港に  
細いほど早く流れる夏落葉

雲 雀 空 松 本 鷹 根

椿落ちそのままと言ふ刻移り  
花枝垂れ風を酔はせる色尽くし  
徒疲れ尺取虫を邪見にす  
見上ぐれば老鶯青き陽を零す  
雲雀空土手の高さを足して見る

藤 波 丸 井 巴 水

麦秋や未だ秘仏の秘を解かず  
藤波にしばし揺らるる翅やすめ  
亀鳴くや釣瓶からまる小町井戸  
筍の皮剥ぎ取らば嬰のみて  
蝌蚪に脚池はときをり笑ひ皺

薄 暑 小 堀 寛

薄暑かな濁りかげんのフランス語  
青蛙雲をしぼるや一二滴  
千枚田恋の白羽の翔ぶごとく  
萬緑やなんで年よる小便小僧  
ちちははの骨卵波する白銀河



# 京鹿子集

## 豊田都峰選

全身の春の光や孔雀舞ふ

擦れ違ふ人の残せし春の闇

花に酔ひ桜に遊ぶていたらく

乳飲子の突張る力山笑ふ

ぼうたんの崩れる音か雨の音

散るさくらやおのが翳りへ散り重ね

葉ざくらや強火で通す厨ごと

花あけびしばらく雨氣の残りけり

朝掘りの筍の香のあらあらし

山背の道はここまで一輪草

宇治 木村真魚奈

久世 佐久間多佳子

初蝶の百万画素の震へかな

古草の青たけだけしまのあたり

たんぽぽの絮に変はるはたぶん夜

酔を少し海雲におとし日の平ら

かたくりの花に届けし母の風

桜とは似ても似つかぬ花愛でる

我が心描く友居て夾竹桃

明け急ぐ発表の日やサンデイエゴ

今朝の夏振り返ることあとにして

夕焼けや出会う数だけ見送りにて

千葉 直江 裕子

江戸 伊吹 之博